



コロナ禍の不自由な生活からもやっと解放されて、これからという時期になりましたが、コロナ感染症に対してはまだ注意が必要です。

このような状況の中で会報が届き、今年の総会は、富士森公園で「+ちょこっと総会」と但し書きで実施するという。コロナ禍で外出もままならない日常でしたから、本当にうれしい案内でした。3年ぶりの開催、本当によかったです。

さて、今年のゴールデンウィークの5月3日に西武秩父線にある伊豆ヶ丘でハイキングしました。いわゆる800m位の低山登山です。何年振りかのハイキングでしたが、予定の半分で下りてしまいました。下肢や膝が痛くなり無理できないと思い決断しました。それから1週間位は階段の下りが大変でした。情けないです。

実は若い頃は、山が好きで時々登山をしました。故郷山形は山に囲まれ、蔵王山（深田久弥百名山の一つです）の麓になります。中学2年時には全員一泊二日で蔵王登山の行事がありました。宿泊は樹氷で有名な蔵王温泉で、雨に降られて、衣類を窓につるして乾燥させた思い出があります。スキーも始めていました。そんな環境から登山を始めたのでしよう。

百名山も数えてみると70山登攀していました。時期は退職した60歳から65歳の間が一番多く、全て単独行です。若かったですね。今は、全くしません。知人で元養護学校長の女性は、「70才からの百名山」の本を自主出版しましたが、脱帽です。私は、百名山を完全登攀する気持ちはさらさら無いですが、これを機会に低山登山を始めようかと考慮中です。

1 過去から学ぶ難しさ～アジア・太平洋戦争 インパール作戦（4）

4月16日に東中野ポレポレ映画館で「白骨街道」と「僕の帰る場所」を鑑賞しました。2本とも三ヤンマーに関わる映画です。

「白骨街道」から分かるように、インパール作戦で戦死した日本人の遺骨を現地の人々が収集する映画です。私は、日本兵の遺骨を探すチン州の現地人ゾミ族の会話が印象的でした。「なぜ僕らが掘らないといけないの」の問いに対して、リーダーの年長者が沈黙する場面です。ゾミ族は仏教徒ではなくキリスト教徒の少数民族です。居住地域も山岳地帯でビルマ人の平野部とは違っていています。

ラスト場面は、日本兵が残した武器、銃や弾薬、飯盒、鉄カブト等のアップと霧と雲海に囲まれた山岳地帯の風景でした。20分足らずの「白骨街道」でしたが、万感の思いの中で終わりました。

もうひとつの「僕の帰る場所」の映画は、軍人政治に反対する民主派家族一家の在日物

語です。難民申請中の三ヤンマー人を描いていますが、「在日外国人の会話」「外国人のビザ申請問題」「難民申請問題」「在留者の生活問題」「子供の教育」などの問題が盛り込まれています。

主人公夫妻の2人の子どもはすでに日本語を話し、日本人になりきっている。両親は、特に母親は子供を三ヤンマー人として育てたいと三ヤンマーに帰国する（父親は日本に残る）。しかし二人の子供は、三ヤンマー国で言葉を含めて苦悩するシーンが印象的でした。改めて、映画の力と在留外国人の生活の難しさを知った一日でした。

さて、私はインパール作戦を調べるにつれて、日本側からの視点ばかりでなく、外国側の視点でも関心を持ち始めました。その一端として、前号の会報にイギリス軍の資料を紹介させていただきました。「白骨街道」にも日本軍に対する見方もあり、とても参考になりました。

インパールは、三ヤンマー国でなくインド国マニゾール州の州都なのです。インパール作戦では、そのインパール陥落まで攻めながらあと一步で撤退しました。破竹の進軍の様子や悲惨な撤退場面を書いた日本側の資料・単行本はかなりあります。しかしながら、三ヤンマー人やインパール人（インド人）から見た日本軍の情報は非常に少ないのです。そこで、野村進氏著「インパール知られざる真実」（2019年8月号中央公論）を参考に現地の人々が破竹の勢いの日本軍を迎え、ボロボロの敗残兵姿で去っていく日本軍をどのように感じたかを書いてみます。

「初めて日本兵を見たが、顔も形もわしらとそっくりだからたまげた」「違うのは、軍服を着て銃剣を持っているところだけだった。」「日本兵に日本語を教えてもらい遊んでもらった」「日本軍は到着した時は本当に立派で勇敢だった」「初めてこの村に日本の兵隊さんがやってきた。それから次から次へと日本の兵隊さんがやってきた。みんな腹をすかしていた。私たちは米や野菜をあげた。日本兵は戦いに出発した。」など好意的で歓迎していた。しかし、敗走後は、「日本の兵隊は戦う武器もなく、食物もなく、疲れ、傷ついて再びこの村に戻ってきた」「疲れ果てた日本兵は笑うこともなく何も語らず、食べることに夢中だった。疲れた足取りで東のジャングルに向かって歩いて消えた。その後、日本の兵隊はやってこない。どこへ行ったのだろうか」「飢えた日本の兵隊は村を襲い、コメ、豚などの家畜を奪い、村を焼き、村民を暴行した。恐ろしいので、密林に避難していた」等、反感を持つようになる。

このように、インパール作戦は現地の人々が住み、生活している場所で戦われた戦争であることを忘れてはいけい。



2 現在の息苦しさ～ウクライナ戦争と日本（1）

2月24日、大国ロシアが突然ウクライナを侵略しました。このニュースほど驚いたことはありません。世界中で、テロ、民族紛争、宗教対立などは絶えることなく続いています。それでも、ウクライナ戦争は私たちにとってかなりショックな出来事です。それは、世界の大国ロシアが自国の理由で簡単に軍事行動に踏み切ったからです。まさか実行するとは思いませんでした。

同時に、ロシアの戦争理由を聞いていると、戦前の日本軍部の言い方とまったく同じように感じました。思いつくまま、列挙してみます。

「現在のロシア」VS「戦前の日本（軍部）」

「ロシアの国を NATO から守るため」VS「日本の国を英米中国オランダから守るため」

「ロシア、ウクライナ、ベラルーシは同じ国」VS「日本、朝鮮、満州は一体」「大東亜共栄圏」

「ロシア人をナチス、テロから保護する」VS「日本人を中国人の襲撃から防ぐため」

「ロシア正教会と一体」VS「日本は神の国である」

ロシアのウクライナ侵略に対する説明は、このように戦前の日本国と似ていると思います。

加藤陽子東京大学教授はこのように語っています。

「今ロシアがウクライナにやっていることは、かつて日本が「同人同種」などと言って満州や朝鮮半島にやったことと似ている。ここを思い出すことで、侵略を仕掛けたロシアが悪いという批判以外に、それをやった日本はどうなったか？歴史的に見る必要がある」と言っています。同感です。

過去から学び、国連を中心にして、二度と戦争を起こさないように取り組んできた戦後77年でした。常任理事国で大国ロシアの侵略はその根本を揺るがしたと思います。

私はこの機会にロシア、ウクライナについて日本人としてどのように理解し行動できるかを考えたい。

3 未来の希望は教育から～日本の教育（1）

5月20日、久しぶりに八王子東特別支援学校を訪問しました。目的は、泉慎一新校長への挨拶と地球冒険学校準備会の体育館を含めた解放事業についての協力要請です。泉校長は笑顔で対応し、快諾してくれたので安心しました。

久しぶりに訪問して、校舎の雰囲気は20年前と違う感じがしました。そんな昔と比較して当たり前だと言われそうですが、清潔感、展示物、挨拶の仕方などからの短い時間での感想です。対応された校長、副校長2人とも多忙中で、授業参観はできなかったのも、この印象は瞬間的です。

この感覚は、他の特別支援学校でも同じでした。何か違うという感覚は以前から持っていました。多くの現職の先生の話聞いて納得しました。

・教員の上着は白。Tシャツはダメで、着衣まで細かく規制する。

- ・校舎内は清潔が大事である。車いすは廊下に置かない。教卓の上の書類もダメ。すべてスッキリ。
- ・上からの指示は絶対で反対意見は聞かない。大声で叱責する。
- ・書類提出に追いかかけられ、遅れると厳しく追及される。など、、、、。

上記の事はすべて、校長の個性・指導内容・学校経営方針によるものです。(当然ながら八王子東特別支援学校ではありません) 校長が代われれば、雰囲気も職場環境も変わります。

要するに、昔も今も基本的なものは同じですが、校長の個性がより一層現れる時代になったということです。従って、教員にとって校長の人格はとても大切に、働き方が左右されます。(私自身振り返ると反省ばかりで恥ずかしいです)

◎教員の現在地

学校は生徒を中心に、保護者、地域そして教員が一体となって営まれる活動です。その中で、教員の働き方の問題点を書いてみたい。初めに、下記のような職場で働かされたらと仮定してください。

- ・兄弟けんかをしているから止めてほしい。
- ・万引きをしているから迎えに来てほしい。
- ・朝7時30分出勤、退勤は夜9時、土日も監督・指導・引率、週54～57時間。

自分の時間がない。残業代はなし。

- ・夜になっても電話で相談や苦情がくる。
- ・仕事内容を示す書類が1学期だけでファイル3冊分で厚く膨らんでいる。
- ・私たちは24時間体制のコンビニ店と自嘲する。

これらはほんの一部です。

おそらくこんな職場では働けないと思うでしょう。しかし、これが日本の教員の現実です。

たとえば、経済協力開発機構（OECD）が調査した国際教員指導環境調査（TALIS）では、日本の教員が仕事をしている時間は参加国で最長でした。

内容は研修などにかかる時間は短く、事務業務は最長と報告しています。これら、教員の仕事内容が多くの人に知られるようになり、ブラック職業などと言われるようになりました。

- ・教員採用試験の受験者の減少。
- ・正規教員の欠員に備えての非正規教員不足で授業に支障が起きているなど。

このような現象も私はすべての教員の働き方に原因があると思います。問題はこれからです。

解決策は諸々考えられます。文部科学省



の政策、民間教育研究会の提案・現場の教員の改善策、第三者審議会答申、学者などの提言・政策はすべて良案で納得します。一人ひとりの教育観もあります。さらに、外国の教育事情も参考になります。しかし、こればベストであるという確証はありません。そこが一番問題なのです。

そこで、教員の現在地をほんの一部ですがこれから伝えたい。教育こそが日本の基礎であり、希望であることを信じて。